OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	植民者のアイデンティティー : 植民地下インドにおける境界の維持
Author(s)	大杉, 高司
Citation	年報人間科学. 1993, 14, p. 67-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

植民者のアイデンティティー

――植民地下インドにおける境界の維持[1]――

大杉　高司

序

植民地行政と初期の人類学者たちの間の相互依存関係が暴露され[2]、「オリエント」や「未開」に対する知識や関心が「知的支配」[3]や「帝国主義的ノスタルジア」[4]の一形態にすぎないと指摘された今日、「オリエント」や「未開」といった概念に対してナイーヴな信頼を寄せることはもはやできなくなってしまった。しかしそれとは対照的に「オキシデント」や「文明」といった概念は依然として揺るぎなき地位を保持しているかのようにみえる。そのことは、「植民地化された」社会の動態を分析することで従来の「オリエント」や「未開」の概念に疑問を投げかけようとする人類学者たちが、変化を不可避的なものとした「植民地化した側＝オキシデント」からの「外圧」を論ずる際には、それを極めて抽象的で物質的なものととらえてしまいがちであることと無関係ではないだろう[5]。「市場経済」「農業技術」「土地改革」などが「未開社会」の変化に重大な影響を与えたであろうことは疑うべくもない。しかし「植民地化した側」をこのような「制度」にのみ埋没させてしまうことは、「植民地化された側」を「伝統」の中に封じ込めてしまうことと同じくらい公平さを欠いたものだといわざるを得ないであろう。

この点で、植民地状況下で働いていた力が政治経済的次元に還元できるものでないことにいち早く注目した精神分析学のはたした役割は大きい。精神分析学者たちの指摘した、自らの「魔術的全能性」を信じて疑わなくなっていく植民者たちの姿は、私たちがフォスターやオーウェルの描き出した植民地社会の中に見出すものであり、独特の説得力をもって読むものの前に迫ってくる。しかしO・

マノニが『植民地化の心理学（一九五〇）』で、L・ヴルガフトが『帝国主義の想像力（一九八三）』で共通して前提するように、植民者たちの心理を被植民者たちの「未開性＝幼少性」から脱しようとする「文明人」の一人立ちの試みであるとする心理還元主義的立場を認めることはできない。[6] F・ファノンは同じ精神分析学の立場からその点を批判し、植民地状況における「病理的心理」は経済的搾取構造という文脈のなかで理解されるべきであることを指摘したが、しかし彼自身経済状況と心理がどのように結びついているのか明快な説明を提示することができなかった。[7]

唯物論や心理学の還元主義に陥ることなく「オキシデント＝植民地化した側」を対象化するためには、西洋文化が「未開」というフィクションを参照することによって自分自身をとらえることができたというS・ダイアモンドの議論を発展させていく必要がある。[8]「オリエント」について論じたかに見えるE・サイードも、実はJ・クリフォードの言うように「近代文化がエキゾティックなものをアイデオロジカルに構成することを通じて自分自身を絶えず構成していく、その複雑で弁証法的な作用を」[9]見ることを私たちに促していたのであり、その点で「オキシデント＝植民地化した側」を対象化するための一定の方向性を示すものだった。

「他者」との関係においてのみ「自己」を確認しえるのだというこうした視点は、日常的に「他者」と対面していた植民地の白人社会の研究によってさらに補強されている。例えば仏領インドシナと蘭領インドの植民者社会について論じたA・L・ストーラーは、植民者社会や植民者というカテゴリーがこれまで考えられていたように所与的で安定的なものではなく、「土着民」との性的接触の制限や支配者として不適格であると考えられた白人の排除などを通じて初めて「外縁＝境界」が確定され、現実のものとして「想像」されていったことを強調している。[10] 彼女が明確にしたのは、オリエンタリストたちが書斎や研究室に閉じこもって「他者」を構築していたとすれば、植民地で生活した白人たちは日常生活を通じて自らの「西洋性」を構築していかなければならなかったという点であり、その意味でストラーの観察した植民地の白人たちの活動は、イデオロギーとしての「オリエンタリズム」と表裏一体の関係にある「オキシデンタリズム的実践」であったということができるだろう。

一九世紀中葉から二〇世紀初頭までの英領インドのイギリス人たちを対象とする本小論は、こうした局面に注目しながら、彼らがどのようにインド人との「境界」を確定し、またそれによってどのように自己をイメージしていたかを簡単にスケッチすることを目的としている。それはまた、ごくわずかの英国人が三億人のインド人を支配したときに、その背後に働いていた「文化」の力の一端を探り出そうとするものでもある。しかし私たちは、「文化」が政治の道具であったという議論や、「文化」的な境界の明示が功利的な計算の問題に還元できるとするような議論を支持するものではない。後に論ずるように、「文化」は日常の実践活動を通じて「自然化」され、精神分析学者が論ずるのと同じような「深み」から個々人をつき動かすものであった。

1　一九世紀の英領インドの「境界」の明確化

一九世紀の英領インドではイギリス人とインド人との間の「境界」が様々な領域で明確化されていった。本章ではまず、そうしたプロセスを助長した二つの要素「白人の責務」の観念と「中産階級の貴族主義」について概観し、次章で扱う問題の背景を提示することにしたい。

§「白人の責務（White Man's Burden）」

白人の責務をやり遂げよ。／汝らの育てし最良のものを送りだし／彼の地で異郷生活を送らせしめるのだ。／捕らわれの身のものたちに仕えるために――／重い馬具を身につけて、／脅える野蛮なものたち／汝が捕らえし忌々しげな／半ば悪魔で半ば子供の彼らに奉仕するために。　（Rudyard Kipling）[11]

一八世紀までのイギリス人にとってインドが専ら商業的関心の対象でしかなかったのとは対照的に、一九世紀から二〇世紀にかけて彼らのインド植民地支配を支えていたのは自らが「文明の伝導者」であるという信念であった。一九世紀末にキプリングが「白人の責務」という言葉に結晶化させた彼らの精神の起源を、私たちは一九世紀初頭の福音主義と功利主義の立場に求めることができる。インド人をヒンドゥー教からキリスト教へ改宗させようとする前者の立場と、インドに法と正義をもたらし次代を担う現地人中産階級を育成することをめざす後者の立場との間には強調点の違いがあったが、インドをイギリスをモデルとした社会へ「改革する」ことができるばかりでなく、本国ではその達成が阻まれている理想状態にまで高めることができると信じていた点で両者は共通していた。[12]

改革主義の情熱はマコーレーによって英語教育などが導入された一八三〇年代にその頂点をむかえるが、しかしそれは情熱の退潮の始まりでもあった。F・ハッチンスはこの変化の背景として、本国で興隆しつつあった中産階級が、宗教者や少数のラディカルな人々が賛美した「廉潔さ」や「勤勉さ」「禁欲の美徳」や「よい行い」への信仰を吸収していくにつれ、それらを自己充足的なモラリズムへと固着化させてしまったことをあげている。[13]それが植民地インドに対してもっていった意味は、例えばW・D・アーノルドの小説「東洋での交友（一八五五）」の以下のような下りに垣間見ることができる。

「わかるだろ、私はインドなど決して好きではないのだ。しかし人間というものは、何か不愉快な義務をやってのけることである種のストイックな喜びを感じるものなんだ。確固とした義務というものがひどい苦難と見なされることで、どれだけそこから喜びが生まれることか！」[14]

自己充足的で禁欲的なモラリズムの時代に人々がインドに引きつけられるとすれば、それはインドが理想社会の建設という場を提供してくれるからではなく、そこで本国では経験できないほどの苦痛で不快な生活ができるからだった。主人公オークフィールドは熱心

なキリスト教徒であったが、彼にとってキリスト教はインド人を迷信から救い出すものではなく、「自分の精神世界を見つめ直すために」インドにやってきた彼をインド人から隔てるその証となるものであった。

完全に「イギリス人化」されたインド人中産階級を育成し、彼らとの共同作業のもとインドを改革しようとする功利主義者の情熱が去った後、「白人の責務」として生き続けたのは、キプリングが歌い上げたように「半ば悪魔で半ば子供の」インド人を前に「重い馬具を身につけて」文字どおり馬車馬の如く働く姿を、道徳的模範として提示することであった。例えば一八五八年にL・ペリーが述べた以下のような言葉では、模範を示すものとそれを舞台の下で眺めるものとの境界が乗り越えがたいものとして認識されている。

「だから我々は、イギリス人とインド人が平等なのだという考えは追い払い、支配人種という本当の地位を受け止めなければならない…我々は高度な模範を示し、真実と誠実さの価値を彼らに感じさせ…支配を確固としたものにしなければならない。…ヨーロッパのジェントルマンを〝安っぽく〟見せるものは何であっても…我々の支配力を失わせてしまうに違いない」[15]

このような作業を担った人々を内面から支えていた理想――「男らしさ」「禁欲主義」「行動主義」「犠牲的精神」etc――が、本国の中産階級の理想を直接反映したものであったことは間違いない。しかし注意しなければならないことは、植民地が常にある種の「過剰性」を秘めた場であったということである。H・アーレントが指摘するように、彼らは「竜退治騎士」という「少年の夢を捨て切れず、そのために正常な世界から植民地勤務へと逃げ出した人々」[16]だった。そして植民地とは、彼ら「奇妙なドンキホーテ」たちの「少年らしい理想」が本国で「危険な大人の理想にならないようにするため」の受け皿を提供し、彼らの「少年らしい気高さ」を「人生のはじめに化石化」させて「壮年時代まで保存」させるような場であったのである。[17]

§「中産階級の貴族主義」[18]と本国文化の再生産

労働者階級出身の兵士や宣教師、船乗りなどを除いて、ほとんどが中産階級出身であったインドのイギリス人たちは[19]、本国では経験できないほど贅沢な暮らしを植民地インドで享受することができた。そこに、本国で勢力をつけつつあった中産階級の関心を国外に向けようとした本国貴族階級の思惑があったことは否定できないであろう。事実B・スパンゲンバーグの指摘するところによれば、本国の貴族にとってはインドとのいかなる繋がりもひどいスティグマと見なされ、一方休暇で帰国したインド高等文官は本国のエリート・サークルでまともにはとりあわられず、予想外の冷遇に辛苦を味あわされることになったという[20]。しかしインドを単に本国中産階級の欲求のはけ口を提供する場であったと見なすことはできない。D・アーノドは、インドへの労働者階級の流入が厳しく制限・監視されたことや[21]、白人の「孤児」「浮浪者」「貧民」が孤児院や労役所の高い壁の奥に周到に隠されたり、公費で本国送還されたことなどを

詳細に報告しているが[22]、こうした事実は逆に、イギリス人たちが支配者にふさわしい装いをすることが植民地状況という文脈で「要請されていた」ものであったことを示していると言えるだろう。

ところで一八世紀の商人冒険家（ナバブ）の時代においても、ある意味でインドはイギリス人を「貴族化」させる場であった。それはインドを一獲千金の場とみなした彼らの中に、インドで築き上げた富をもとに本国で貴族の地位や議会での席を手に入れる者がいたからである。一九世紀のインドのイギリス人たちの「中産階級の貴族主義」をそうしたナバブたちから明確に隔てていたのは、ナバブたちが少なくともインドにいる限りでインド流の生活様式を取り入れ、衣食住すべての面で「インド化」していたのとは対照的に[23]、彼らが本国の上流階級の文化をモデルとしてそれを模倣し、自らを限り無く「イギリス化」していった点にある。そしてそれは、インド人やインド文化から自らを隔て、植民地インドに飛び地的なイギリス人コミュニティーを作りあげるものであった。

本論では具体的にどのような「イギリス文化」が再生産されたかを詳しく論ずることはできない。そこでここでは、一九世紀の英領インドにおける「イギリス文化」の再生産（それは「イギリス文化の純粋培養」と呼びうるような作業である）に重要な役割を果たしたイギリス人女性の問題と、再生産の作業が結晶化したヒル・ステーションという場について簡単に触れることによって次章以下の背景を提示することにしたい。

イギリス人女性が大量に流入し始めた時期について特定することはできないが、多くの論者がそれを一九世紀中頃に求めている[24]。インドの厳しい環境は女性には耐え難いという説明や、結婚が生む経済的圧迫がイギリス人の威信を損ないかねないといった主張が、それまで女性の流入を抑制していたが、しかしいったん女性たちが植民地社会に定着すると、反対に彼女たちは白人の威信の源泉とすら見なされることになる。それは、彼女たちの役割が「遠く離れた敵地で素敵なイギリス家庭を作りあげる[25]」ことにあったからである。一八四五年に、E・イーストレイクが植民地のイギリス人の特徴を論じて「イギリス人が異国の地で融通が利き、すぐその環境に順応してしまうのは、ただ彼らが自分と一緒に〝イギリスそのもの〟を連れていくからである[26]」と述べているが、そうしたミニチュア版の「イギリス」づくりに彼女たちはもてるエネルギーのほとんどすべてを費やし、そして実際に「一九世紀のインドのイギリス人女性を見ると、住み慣れない…遠く離れた地で、特殊イギリス的生活を送るのに見事に成功していたと結論することが[27]」できたのだった。絨毯や家具などの調度品から、衣服、食料に至るまであらゆるものを本国から輸入し、本国風の芝生や花を必死に育てたばかりでなく、二〇世紀初頭に観察したモード・ダイバーに「イギリスが五時の紅茶の国であるとするならば、インドはディナー（パーティ）の国である[28]」と言わしめるほどの社交サークルを作り上げた彼女たちは、そうすることで「生活の文明的水準」を維持しイギリス人の「イギリス人」としての自意識形成に重要な役割を果たしていたといえる。

女性たちが家庭や社交界を作りあげたとすれば、ヒル・ステーシ

ョンはインド人社会から物理的に隔離された場所に、より完全な形で「イギリス的環境」を作りあげるものだった。グルカ戦争（一八一五）で既にその名が知られていたヒナラヤの地シムラに徐々に建物が建て始められた一八二〇年代から、高地の魅力はイギリス人の関心を引き始め、最終的にビルマとセイロンを含め四九箇所ものヒル・ステーションが設営されている。[29] ヒル・ステーションの魅力は何よりもその気候の快適さにあったが、それは彼らに本国の気候を思い出させるものであった。例えば次のようなリットン卿の言葉——

「（オータカムンド）を見た今、私はそれが地上の楽園だと確信している。…午後は雨がちで道はぬかるんでいるけれども、それは美しい英国の雨であり、すばらしい英国のぬかるみである。[30]」

そして、自然環境としての「英国らしさ」は、異国生活を余儀なくされたイギリス人の想像力によって、容易にイギリス人のイギリス人らしさと結びつけられた。ヒル・ステーションでは、子弟の教育をはじめ、結婚、出産、埋葬などの主要な人生儀礼がとり行われたが、そのことは次のような確信に満ちた言葉と反響している。

「ソナワールの気候は全くもって英国的である…ここでは、習慣、体型、精神的な活力などあらゆる面で、生粋の英国人を育て上げることができる。[31]」

衣食住から娯楽などの社会風俗に至るまで、あらゆるイギリス的なものが再生・消費されたヒル・ステーションは、単なる避暑地というよりも、文化的サンクチュエリと呼ぶにふさわしいものであった。任地に散々になったイギリス人たちは年に一度ヒル・ステーションという「心暖まる英国的環境」で再会することにより、文化的アイデンティティーを確認しあうことになったのである。

「白人の責務」の観念と「中産階級の貴族主義」は、イギリス人のあるべき姿を確定し、彼らの間に想像上の一体性を現出させた点で共通している。確かに両者の間には矛盾する点があったが、もしその矛盾が致命的なものと見えるとすれば、それは実際にはとらえ所のない現実から人工的にいくつかの要素を抽出しようとする試みそのものが、しばしば現実を裏切ってしまうからなのかもしれない。おそらく現実のなかでは両者は複雑に絡みあい、日常のさまざまな活動を方向づけていた。次節では、その中からスポーツ、性、医療に関わる活動に焦点を絞り、本章で概観した旋律が日常の場面でいかなる具体的表現をとっていたかを見てみることにする。

2　境界維持の実践と差異の身体化

§スポーツ、肉体、モラル

クリケットやサッカー、ポロやハンティングなどのスポーツは一九世紀英領インドのイギリス人たちの日常生活のなかで欠くべからざる重要な部分をなしていた。[32] 彼らのスポーツへの傾倒が単なる趣味や娯楽の次元に留まるものでなかったことは、植民地行政官がいかなる資質をもつべきかについて述べた次のような発言からも推察できる。

「未開人の取扱いについては、すべての面で〝サヒーブ（支配者）〟で、スポーツマンで、運動家である人間のほうが、学業成績の良さだけでその地位に登った、やさしく、おだやかな、恐らくより勤勉な官僚がまれにしか達成できないような成果をあげるのが普通である。[33]」

彼らが「スポーツマンで運動家」でなければならなかったのは、単に外見上そうであったほうがインド人に尊敬されるというレベルの問題ではなく、「未開人」の取扱いについては「博学この上ない法律家のフロックコートの下よりも名門大学の運動選手のブレザーの中に、生来の行政能力が潜んでいることが多い[34]」と信じられていたためである。

明らかに、スポーツへの信仰にも似た態度は「白人の責務」に含まれた諸観念――行為への信仰、禁欲主義、男らしさ――が特殊な表現をとったものであった。そのため「白人の責務」の問題が常に道徳的な問題であったのと同じように、イギリス人の肉体的強靱さは道徳的優位性の問題とはほとんど直接的に結びつけられている。例えばそのことは、ベンガル人の「弱々しさ」について言及した次のようなマコーレーの言葉に裏返された形で表現されている。

「ベンガル人の身体の作りは弱々しく、衰弱しているとすら言える。…（彼らの）手足は華奢で、動きには気力がない。…勇気、独立心、正直さは、彼らの性格とおかれてきた状況がその形成を難しくしてきたような性質である。[35]」

肉体と道徳の結びつきは、スポーツのルールがイギリス文化全体を貫く価値の縮図となっていると考えられることでさらに強化された。「近代クリケットの父」でボンベイ知事になったロード・ハリスが、インド人がもし「クリケットの競技規則や作法を習得するならすぐにでも政治的に責任ある立場につくことができるであろう[36]」と述べたとき、それは逆に、クリケットの「競技規則」や「作法」を熟知したイギリス人が支配者の位置に留まっていることの正当性を主張していた。つまりスポーツは、支配に使える装飾品や道具であったというよりも、むしろ支配そのものの道徳的根拠を提示するものであったといえる。

ボーイスカウトの創始者であるベーデン・ポーエルが「外界の暗黒なる力を征服しつづける帝国主義の道徳的力のエンブレム[37]」であると賛美したハンティングは、そうした道徳的根拠の提示をもっとも儀礼的な形で示すものであった。そしてそれは本国から王族が訪問したときもっとも際立ったものとなる。一八七五年にインドを訪れたプリンス・オブ・ウエールズ（後のエドワード七世）は彼がハンティングで見せた「王家にふさわしい勇気、精力、肉体的力の資質」によって「ブリティッシュ・ラジの化身（incarnation of British Raj）[38]」であることを印象付け、一九一一年に帝国皇帝会合のために訪れたジョージ五世は、その時見せた優れたライフルさばきにより「スポーツの世界のバヤール（Bayard, フランスの英雄的兵士、比喩的に勇気と廉恥の人）[39]」の名を冠されている。しかも、王族によって示されたこうしたモデルは「中産階級の貴族主義」の文脈のなかで多くのイギリス人たちに直ちに再生産された。「暗黒なる力を征服

する」帝国主義的正義の担い手にとって、ハンティングをすることは一種の道徳的義務でさえあり、それが「思索」より「行動」を、デスクワークより野外活動を尊重する「白人の責務」の観念に補強されながら、そしてまたハンティングが任地の地勢や住民を知るための最も優れた方法であるという合理的な説明による正当化をうけながら、インド各地のイギリス人たちにある種信仰の域にまで高められたものとしてとり行われていたのだった。

それが手続きを厳格に定められた文化的儀礼であったことは、インド土着の猟師たちの狩りが「残酷」で「男らしくない」「卑劣」なものであると判断されたことにも表れている。イギリス人の作法を取り入れることに必死だったインド土着の貴族のハンティングに対してもそれは同じであった。一九二一年に訪印したプリンス・オブ・ウエールズ（後のエドワード八世）は、バローダの藩王がチーターやレオパードを使って獲物を追い詰めている狩りをみて、それがスポーツマンらしく獲物にチャンスを与えない "unsporting" で "un-British" なやり方だと非難している。[40] ハンティングの儀礼的性質はまた、当初それが人喰いライオンや穀物を荒らす猪から「土着民」を守るという名目によって正当化されていたにもかかわらず、一九世紀末以降濫獲のため獲物が減少すると、「土着民」の意に反した動物保護やハンティングの資格制限、国立公園の設立などが進められなければならなかったことにも表れていた。[41] 皮肉なことに、「外界の暗黒なる力」は、イギリス人の想定した「敵」であったのと同時に、それがなくては自らの「イギリス人らしさ」が確認できなくなるがゆえに、イギリス人にとってなくてはならないものであった。

ハンティングにもっとも明らかなように、英領インドのイギリス人たちのスポーツは、それ自体が目的であるような中立的で周縁的な領域では決してなく、支配人種たる彼らの自己イメージと密接に関係した、アイデンティティー確認の場であったといえる。しかし、英領インド・ビルマで警察官として勤務した経歴のあるG・オーウェルが、その経験に基づいて書いたエッセイ『象を撃つ（一九三六）』[42]で極めて生々しく描いたように、スポーツに集約化された諸価値は、意に反してでも象を撃たねばならないイギリス人自身をも強く拘束するものであった。もっとも、その場の秩序に拘束されているという意識は、その外に出て初めて認識されうるものであろう。「テニスがイギリス人に課せられた神秘的儀式である」と信じて疑わない現地人召使いにテニスをさぼることを責められながらも、自分自身「日中に一度くらいは汗びっしりにならないと…不安で気が狂いそう」[43]になると感じた『ビルマの日々（一九三四）』の主人公ローニーを内面から突き動かした衝動こそ、英領インドという現実のうちに生活したイギリス人たちが実際に経験していたものだったはずである。

§　性と「文化汚染」

東インド会社がインド人女性を情婦や妻とすることを認めていたばかりでなく、公式の方針に基づいてそれを奨励しさえもしていた

一八世紀までとは対照的に、一九世紀には両人種間の性的接触は徐々に制限されていく方向へと向かっている。一八三五年にはインド人との結婚はいかなる理由によっても認められないものとされ、一九世紀中頃、特に一八五七の反乱以降は、情婦を囲うことも個人の昇進に関わるほどのスティグマとみなされるようになる。一八三五年に総督となったメトカーフは、一八〇九年から一八一七年までの間に三人のユーラシアン（混血）をもうけたが、一八五三年に書かれた伝記ではそのことは一言もふれられることがなかった。[44]

ボールハチャットが詳細に報告しているように、現地人女性を妻や情婦とすることに圧力が加えられたとき、公式的な理由とされたのは、彼女たちが陰謀を企てそれが行政官たちの職務上の腐敗を招くことになるというものであった。一八五三年に併合されたばかりのビルマは度々議論の舞台となったが、ビルマ政務長官ばかりかインド総督や本国のインド担当大臣をも巻き込んだ議論のなかで、このような合理的説明が何度も繰り返し唱えられている。[45]

仏領インドシナの文脈でA・L・ストーラーが指摘しているように、一九世紀における性に対する態度の変化が「ヨーロッパ人コミュニティーの内的結合力を再確認し、植民者と被植民者との間の境界を再定義しようとする全般的努力に伴う」[46]ものであったのは間違いないであろう。しかしそのことを、支配を安定化しようとする「合理的」態度が一九世紀になって表面化してきた結果であると見なすことはできない。そもそも現地人女性が陰謀を働いているという一九世紀のイギリス人たちの主張を証拠だてる事実には乏しかったし、一八世紀に現地人の情婦や妻をもつことが奨励されたときにも、それが心身の健康維持につながるばかりでなく、"Sleeping Dictionary(Walking Dictionary の捩りで、そこには性的な意味も含まれていたであろう）" と称された彼女たちから任地の情報を得ることができるといった「合理的」な説明が用意されていたからである。[47] ビルマでの「不純行為」を聞き及んだカーゾン総督（一八九九～一九〇五在任）が「もし以後の生活で身を清めなければ、昇進は望めず名もないものとして抹殺されることになろう」[48]と熱弁をふるったとき、その背後に特殊な文化的判断があったと考えるのはごく自然なことと思われる。

英領インド植民地文学について詳細な研究を行ったA・J・グリーンバーガーが明らかにしているように、一九世紀後期以降の作品のなかでインド人女性がとりあげられるとき、彼女たちは常に、見境もなく愛する人に身を捧げる「情熱的」で「官能的」な、そして時に「理解不能」な危険性を秘めた存在として描き出されている。[49] しかしその「理解不能性」への恐れは、単に個としてのインド人女性を越えて、インド文化全体の中心要素であると信じられた「女性性」に対しても向けられたものであった。例えば一九〇九年にモード・ダイバーが既婚女性の婦人室「ゼナーナ」を描写して「そこでは苦痛と苦悶に横たわったインド女性が、迷信に看護され、呪文と御呪いによって治療されている」[50]と述べたとき、それは、扉の閉ざされた女性的な領域でインドの神秘的な力が保持されているのではないかというイギリス人たちの想像力を代弁していたと言えるだろ

う。こうした傾向はまた、ヒンドゥー教の神々のなかでイギリス人たちの関心を引き付けたのが、男根に象徴されるシヴァではなく、誘惑、堕落、暴力、死などと結びつけられた移り気の女神カーリーであったことにも反映されている。彼らにとって「インド性」とは「男性性」を征服していくカーリー的魔力によって特徴づけられるものであった[51]。

キプリングの小説『ナウラーカ（一九一三）』はこのようなカーリー的魔力と対決する植民者たちの姿を描写した作品の一つである。ハーレムの密室の中から王国を操る女王シターバイからネックレスを奪い取ろうとする主人公ターヴィンは、女王の魔法と性的誘惑から辛くも逃れ、「ムスクのにおいが鼻につく」粘液に覆われた洞窟から脱出している。そして「太陽がさんさんと輝くこの地上では何物も恐れない[52]」彼の「男性性」は暗闇で去勢されるのを免れる。こうしたキプリングのプロットが、一九世紀中頃以降支配的になった「禁欲的男らしさ」のイメージを反映していたのはまず間違いないであろう。そしてそれはインド人女性を情婦や妻とすることが忌避されていったことと背後で結びついていたに違いない。

しかし、インド人妻や情婦が英領インドの白人社会から姿を消していったことにもっと直接的な形で影響を与えたのは、一九世紀中頃以降急速にその数を増やしていったイギリス人女性の存在であった。「若い乙女を積んだ貨物船」に乗りこんで夫を求めにやってきた彼女たちが、インド人女性に対する性的ライバルであったことはいうまでもない。異人種間の「不純異性行為」を摘発する多くの「社会浄化」キャンペーンが彼女たちに担われており[53]、フォスターの『インドへの道』を書評したある人物は「イギリス人のなかで最も強烈に自分たちの優位性を主張し、その態度が最も露骨で残忍だったのは女性たちだった[54]」とまで表現している。しかし、度々指摘される彼女たちの排他的で不寛容な態度を、彼女たちが植民地インドで置かれていた位置――「純粋培養のイギリス文化」の担い手――を無視して語ることはできない。

アンナ・デイヴィンは白人女性の「女性性」が帝国主義の文脈で優勢種を再生産する「母性」によって定義されたことを指摘しているが[55]、それは植民地インドにおいてはインド人女性の「魔性」からイギリス人女性たちを明確に区別するものであった。しかし彼女たちが生物学的に「男性的存在」の「母」でなければならないのと同じくらい重要なことは、彼女たちが文化的にも「母国文化」の権化たることが求められていたことである。その意味で、インド的なるあらゆる要素を日常生活から排除することになった彼女たちの存在によって初めて、性は明確に文化的問題となったと言える。インド文化の特徴が「男性性」を屈伏させていく「女性性」にあったとすれば、インドの女性のあやしい魅力に屈して性的接触をもつことは、土着化＝インド化を意味した。性的接触がなんらかの汚染をまねくものであったとすれば、それは「文化的汚染」に他ならず、「母＝英国文化」の権化たるイギリス人女性は身を呈してそれと戦うことになったのである[56]。

§　医療と「文化的健康状態」

V・S・ナイポールの「傷ついた文明」[57]というとらえ方にも生き続けているように、「病い」のレトリックは「治癒されるべき」インドを描写する言説の中にくり返し現れている。しかし実際にコレラ、マラリア、癩病、天然痘などが蔓延する英領インドで生活したイギリス人たちにとって、「病い」の問題はレトリックのレベルにとどまらない極めて現実的な問題であった[58]。一九一三年にインド医療委員会のハブロック・チャールスが、インドの環境に対して「我々第一世代は奮闘するが、二代目は衰弱・衰微し、そして三代目四代目に至っては絶滅してしまうであろう」[59]と述べたとき、そこには「責務」をはたす活力を維持しなければならなかった彼らの不安がストレートに表現されていた。

一九世紀の英領インドの医学を支配していたのは、環境の複合作用によって生ずる有害な発散気に病源を求める「環境病因論」であった。マラリアが語源的に「悪い空気」を意味したように多くの病気は「発酵性」のものと考えられ、発酵の原因となる「環境」には高温多湿などの気候環境や、腐敗した草木、死体、汚水、排泄物などが数え上げられている[60]。A・キングが詳細に報告しているように、こうした理論はイギリス人の生活空間の設計に重大な影響を与えている。例えば兵営や住居は、インド人街や彼らの農耕地から離れた風上側に位置づけられ、個々の建物の構造も、一人当たりに必要であると計算された「清浄な空気」の体積量や、換気、太陽光線の遮断などの配慮のもとに決定された[61]。言うまでもなくこのような理論の空間化＝物質化は「インド的環境」からの隔離や差別化を生み出すものであった。しかも英領インドの論理は、医学の言説の中に「インド的環境」に対する道徳＝文化的非難をも滑りこませることになる。一八六八年に「ブーリーの偶像崇拝のぞっとするような退廃と結びつくときほど、人間の精神が破滅的になることはめったにない」[62]と断言したのは宣教師でも熱狂的な改革主義者でもなく、綿密な調査のもとコレラの主要な発生源が「不快な臭気を発する」ヒンドゥー聖地であると報告したベンガル衛生局長であった。

ノラ・ミッチェルの指摘によれば、英領インドの環境病因論は山や川、沼地から立ちのぼる毒気に病源を求めるギリシア以来の環境決定論に由来している[63]。しかし、それを単純に「未発達」の医学理論の「残存」と見ることはできない。むしろそれは植民地に固有の文脈で積極的に維持され、再生産されていたものであった。そのことは、熱帯の暑さが健康に害を与えるという議論が、本国で一八九〇年代以降進展しつつあった病原菌理論によって「妄想」として退けられようとしたまさにその時に、太陽光線有害論が新たな理論武装のもとに唱えられ、二〇世紀も半ばになる頃まで強力に植民地のイギリス人たちの心をとらえた事実に最も明らかである。

新たな太陽光線有害論は一九〇五年に『熱帯の太陽光線が白人に与える諸影響』を著した米領フィリピンのL・E・ウッダラフ博士の議論の影響を受けたものであったが、それは以下の三点でそれまでの議論と異なっていた[64]。第一に、発酵を助長する太陽熱にではなく、紫外線などの化学線に有害性が帰せられたこと、第二に、化学

線が有色人種の皮膚よりも白人の皮膚を透過しやすく、それが白人の神経を過剰に刺激し、不眠症、記憶障害、過敏症、無気力症、アルコール依存症、性的放蕩などの症状を引き起こすとしたこと、そして第三に、白人は化学線の少ない環境で育ったため人種的にすぐれているが、「白人は少なくとも〝白い〟ままでいたいのならば熱帯の環境に気候順化することはできない」[65]ことを強調したことである。ダン・ケネディーの指摘するように、議論が説得力あるものとして広く受け入れられた背景には、それが植民地のイギリス人たちに常に問題とされていた「衰弱への恐怖」に科学的根拠を与え、しかもその恐怖を「〝文明的な〟振る舞いと〝野蛮な〟振る舞いとの社会的境界の不明確化と、白人と有色人種との身体的境界の不明確化」[66]に対する恐怖の問題と結びつけたことがあった。

しかし「衰弱の恐怖」を代弁していたということ以上に重要であると思われるのは、この新しい環境病因論がイギリス人たちの「衰弱」を避けられない事実として確定したことであった。そしてそれはおそらく、責務を果たす立場にいることの名誉を賛美しながらも、その遂行が常に苦難と見なされなければならなかった「白人の責務」の論理を反映したものであった。一方で、「衰弱する」ことは責務を果たす活力を失うがゆえにあってはならないことであったが、他方で、「衰弱しない」ことは「責務」そのものを意味のないものにしてしまうというパラドックスがそこにはある。ハンティングで「外界の暗黒なる力」を征服する力を見せつけるためには、動物保護や国立公園の設立によって「暗黒なる力」そのものを再生産させなければならなかったのと全く同じように、「衰弱の恐怖」と戦うためにはその「恐怖」の存在自体が医学的に保証される必要があった。その意味でこの新たな環境病因論は、「衰弱の恐怖」をその根源から断ち切ろうとする病原菌理論から、「外界の暗黒なる力」を救済しようとする試みであったと言うことができるであろう。

こうした視点からは、熱帯の環境からイギリス人を守るために医学的に奨励されたあらゆる事柄、例えばトピと呼ばれた植民地特有の日よけ帽をかぶること[67]や、紫外線から脊髄を守ると考えられたスパイン・パッドを身に付けること[68]、バンガローの回りに樹木を植え日陰を作ること[69]や、定年制を施行し「純血種」のイギリス人を輸入し続けるといったこと[70]などのすべてが、同時にイギリス人たちの人種的優位性や彼らが熱帯の環境と戦う姿を印づける極めて儀礼的な活動であったことがわかる。そしてそれらは、ハンティングの場合と同様、「獲物＝病気」を駆逐し尽くす効率性よりもむしろ、厳格に定められた手続きを重んじながらとり行われたにちがいない。「責務」を果たし終え、本国へ向かう汽船に乗りこんだイギリス人たちが、船腹が港を離れるや否や炎天下一斉にトピを海に投げ入れた姿に[71]、私たちは単なるセレモニー以上の意味を読み取る必要がある。

二〇世紀初頭の太陽光線有害論は、「医学的」には新たな表現を取っていたものの、それが社会・文化的に持っていた意味はそれ以前の環境病因論一般の延長線上に位置づけられるものであった。病原菌の前にイギリス人もインド人も平等な立場に立たせるのではなく、両者の間に明確な境界線を設け、後者に負の価値をおわせた点

で、それは一八三〇年代にコレラとヒンドゥー聖地を結びつけたのと同じ想像力に支えられていた。インドの気候環境は、ヒンドゥーイズムと同様インド人を育む環境であり、それがイギリス人に対してもっていた「危険性」や「順応不可能性」の点でなんら変わるところがなかったのである。

コレラがヒンドゥーイズムと結びつけられたのと同じように、「健康状態」がイギリス文化と重ねあわされる傾向があったことをヒル・ステーションほど明確に示してくれるものはない。ノラ・ミッチェルの指摘するように、ヒル・ステーションは何よりも健康保養地として始まったのであり、その位置の決定や年に少なくとも一度ヒル・ステーションに移住する習慣を正当化するのに、医学的配慮ほど重要な役割を果たしたものはなかった[72]。しかし先にも触れたように、ヒル・ステーションは単に涼しく健康な環境を提供したばかりではなく、イギリス人としてのアイデンティティーを確認する文化的環境を提供するものであった。ヒル・ステーションの「健康な」環境は同時に、「習慣、体型、精神的活力などあらゆる面で、生粋の英国人を育て上げることのできる[73]」極めて「英国的」な環境だったのである。二〇世紀に入って新たな太陽光線有害論が一般に受け止められるようになった後も、平地に比べてヒル・ステーションの方が逆に紫外線が強いという事実はあまり気に止められず、相変わらず「健康な」環境として半ば熱狂的に崇拝されていた。そのことは、はからずも、環境病因論の純粋に「医学的」な意味内容よりも、「文化的」意味内容の方がはるかに重要であったことを間接的に示しているように思われる。つまり問題となっていたのは、「肉体的健康状態」というよりもむしろ「文化の純血性＝文化的健康状態」であった。そしてともに「禁じられた」事項であった Acclimatization(気候順化)と Acculturation(文化変容)とは、植民地の文脈で、単に言葉の響きの類似以上の強い結び付きをもっていたのである。

3 結びにかえて

イギリス人とインド人とを隔てる社会・文化的「境界」は、単に想像力豊な（想像力の乏しい？）知識人たちが書物のなかに定着させた架空の構築物であったわけではない。植民地のイギリス人にとって「境界」は日常のさまざまな場面で認識され、再生産され、補強されねばならない「生きた現実」であった。イギリス人たちの「強靱さ」や「男らしさ」「健全性」は、言葉によってそう定義されるばかりでなく、植民地のイギリス人たちに実際に「演じられる」ことで「現実」のものとなり、インド人の「弱々しさ」や「魔女性」「病い」と対比されることになったのである。

しかし「演じられた」ものだからといって、それが合理的な計算に基づいた利益極大化の行動であったなどと結論づけてはならないであろう。彼らの入念な演技を政治の「道具」にやせ細らせてしまうような「道具主義的」議論[74]によっては、スポーツをしないと「気が狂いそうに」なりインド女性の魔性に脅え、「健康な」環境づくりに熱狂した彼らの姿をとらえることはできない。本小論で扱った

スポーツ、性、医療をめぐる彼らの活動は、明らかにイギリス人とインド人との間に横たわる差異を「身体化＝自然化する」活動であったが、客観的立場に立った分析者がそう断言することと、その場に巻き込まれた人々が「自然化された差異」を生きることとは全く次元の違う問題である。P・ブルデューの「ハビトゥス」の概念が示唆しているように、彼らは欲するとしないにかかわらず植民地の客観的構造を内面化し、体質と化すまで「身体化」された掟に従いながら、前反省的な営みとして日常を生きていたはずである。[75] そして、彼らが身体とはり合わせになった「情動的」活動のなかで、スポーツをしない者やインド人女性の魅惑に屈した者、インドの環境で衰弱した者を「イギリス人らしさ」を欠いた逸脱者だと排除したとき、それはインド人ばかりでなく自分自身をも欺くものであったといえる。

さらにまた、スポーツを奨励し、情婦をもつことを禁じ、新しい環境病因論を唱えた個々の人物をたどることができたとしても、その人物を権力の「創始的主体」[76]と断言するだけでは植民地状況で働いていた力の性質を理解することはできないであろう。植民地状況における力は、ブルデュー的な意味での「実践」を担ったすべての人々に集合的に支えられていた。そしてその個々の「実践」は、C・ギャーツがバリの闘鶏を「彼ら自身が彼ら自身を物語る」[77]と表現したのと同じ意味で、極めて自己言及的なものであったといえる。パブリック・スクールを出たばかりでイギリスでの実際の生活経験の乏しい彼らは、異国の地で、誰に命令されるまでもなく「自分が何者であるのか」を問い、日常的な「実践」を通じて自分自身に関する「説明」を生産していたのだった。それが生み出した力は、法や軍隊の力に似たものというよりもむしろ、J・ドーストが「オート・エスノグラフィー」と言う概念を使って整理したポスト・モダン状況における文化の力、すなわち、文化が自分自身についてのイメージを再生産し、それを自らに無限に書き込んでいくことで、自己の「本質性」や「純粋性」「卓越性」を主張していく時に見せる力に似たものであったはずである。[78]

ところで一八七〇年代以降彼らは自画像の裏側に「本物のインド人」をも作りあげている。都市で日常的に接していた「堕落したインド人」と対比的にとらえられた「本物のインド人」とは、北西辺境の部族民であり、地方の農民であり、インド土着の貴族であった。[79] そしてイギリス人と「本物のインド人」とが各々その「本質性」や「純粋性」を維持し続けている限りで、時に両者は互いに共約可能なものと見なされている。一九世紀末に北西辺境の部族民との戦いが小説や伝記のなかで神話化され、勇敢で男らしい部族民と戦うことによってこそ自らの「真のイギリス人らしさ」を取り戻すことができるという図式が反復されたことや、[80] 一八七七年以降合わせて三回開催された皇帝会合（Imperical Assemblage）で英国の授勲制度とインドの封建制とが奇妙に「接ぎ木」されたこと[81]などがそのことを示している。しかしそれらはいずれも、ベンガルを中心に徐々に台頭しつつあったインド人中産階級をほとんど完全に無視することによって可能となるものであった。英語教育を受け、言葉ばか

りでなく趣向や思考方法においてもイギリス流を取り入れた彼らは、歴史の流れのなかで文字通り現実のインドを代表する地位にのぼりつめようとしていたが、イギリス人にとって彼らは「本物のインド人」の姿から逸脱した奇妙な「融合物」であり、「境界」を乗り越えイギリス人の地位を侵食しようとする危険な存在だったのである。[82] 彼らのナショナリズム運動から逃れるためにカルカッタからデリーへの遷都が決定され（一九一一年）、そこで西洋古典建築の様式にインド的建築様式の最も「純粋な」要素――それはアクバルのインドばかりか、カイロやダマスカスのサラセン様式を経て、ビザンツ様式や古代ローマ様式にまで遡ることのできる要素であると考えられた――を「接ぎ木」した建築物が建てられたとき、それは「純粋性」の殻のなかに閉じこもってインドの現実の姿を見定めることができなかった彼らの支配の終焉を予告するものであったと言えるだろう。[83]

注

（1）本小論文は一九九二年一月に提出された修士論文『植民地下インドの「英国」文化』のダイジェスト版である。枚数の制約上論拠となるかなりの事例を省かざるを得なかった。不明確な点については以下注に記した文献および修士論文を直接参照して頂ければ幸いである。

（2）例えば、Gough, K. "New Proposals For Anthropologist" in *Current Anthropology*, 9, 5, pp.403-406, 1968; Asad, T.(ed.), *Anthropology & Colonial Encounter*. London, Ithaca Pr, 1973; ルクレール、G.『人類学と植民地主義』平凡社、一九七六など。

（3）サイード、E.『オリエンタリズム』平凡社、一九八六。

（4）Rosaldo, R. *Culture and Truth*, Beacon Pr., 1989, pp.68-87.

（5）Stoler, A.L. "Rethinking Colonial Categories" in *Comparative Studies of Culture and History*, 1989(a), pp.134-161. は同様の視点からこれまでの植民地社会研究を批判的に検討している。特に pp.134-135 にあげられた文献は重要であろう。

（6）Mannoni, O. Prospero and Caliban: *The Psychology of Colonization*. tran. by. P. Powesland, Univ. of Michigan Pr., 1990 (Fr. ed. 1950); Wurgaft, L. *The Imperial Imagination: Magic and Myth in Kipling's India*. Wesleyan Univ. Pr., 1983.

（7）ファノン、F.『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房、一九八四（原書 一九五二）六四-七六頁。なおファノンの議論を批判的に検討したものとして Mcclouch, J. *Black Soul and White Artifact*, Cambridge Univ Pr., 1983 がある。

（8）Diamond, S. *In Search of the Primitive*, Dutton, 1974.

（9）Clifford, J. *Predicament of Culture*, Harvard Univ. Pr., 1988, p.272.

（10）Stoler, *op.cit.* および Stoler, A.L. "Making Empire Respectable: the Politics of Race and Sexual Morality in 20th-Century Colonial Cultures" in *American Ethnologist*, 16, 4, 1989(b), pp.634-660.

（11）cit. in Hutchins, F. *The Illusion of Permanence: British Imperialism in India*, Princeton Univ. Pr., 1967, pp.41-2.

（12）詳しくは、Hutchins, *op.cit.*, pp.3-19. また特に功利主義については、Stokes, E. *The English Utilitarians in India*, Oxford Univ. Pr., 1959.

（13）詳しくは、Hutchins, *op.cit.*, pp.20-52.

（14）cited in *ibid.*, p.20.

（15）cit., in Hutchins, *op.cit.*, pp.26-27.

（16）アーレント、H.『全体主義の起源2』みすず書房、一九九〇（原書 一九五一）一四一頁。

（17）*ibid.*, pp.141-142.

（18）Hutchins, *op.cit.* の言葉 "A Middle Class Aristocracy" を訳したも

の。また Wurgaft, L. *op.cit.* では即席貴族 "Instant Aristocrat" という言葉が使われている。

(19) Spangenberg, B. "The Problem of Recruitment for the Indian Civil Service During the Late Nineteenth Century", in *J. of Asian Studies*, XXX, 1971, pp.346–360. によれば、特にインド高等文官の場合はその九〇%が中産階級出身だった。

(20) *ibid.*, pp.353–355.

(21) Arnold, D. "White Colonization and Labour in Nineteenth-Century India" in *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, 11, 2, 1983, pp.133–158.

(22) Arnold, D. "European Orphants and Vagrants in India in The Nineteenth Century" in *The Joural of Imperial and Commonwealth Hisitory*, 7, 2, 1979, pp.104–127.

(23) Kincaid, D. *British Social Life in India. 1608–1937*, George Routlege & Sons, Ltd, 1983, pp.83–137. はナバブたちの生活を詳細に描写している。

(24) Bailey, F.S. Women and The British Empire, *Library of Congress Cataloging in Pablication Data*, 1983. はこの分野に関する詳細な文献目録を提供している。

(25) *ibid.*, p.32.

(26) cit. in *ibid.*, p.34.

(27) *ibid.*

(28) cit. in Wurgaft *op.cit.*, p.42.

(29) ヒル・ステーションに関して詳しくは、Spencer, J.E. 1948. "The Hill Stations and Summer Resorts of the Orient" *Geological Review*, 38:4, 1948, pp.637–51; King, A.D. *Colonial Urban Development*, Routlege & Kegan Paul, 1976, pp.156–179; Hutchins, *op.cit.*, pp.104–106; Wurgaft *op.cit.*, p.43; Allen, C. *Plain Tales from the Raj*, Futura, 1991(1975), pp.152–161. を参照のこと。

(30) cit. in., King p.165. なお、オータカムンドはマイソール近くのヒル・ステーション。

(31) Royal Commisionon the Sanitary State of the Army in India, cit. in *ibid.* ソナワールはシムラ近くのヒル・ステーション。

(32) 彼らのスポーツへの熱狂ぶりは例えば Allen, C. *op.cit.*, 1991(1975), pp.129–140; Macmunn, Sir G. *The Living India*, Neeraj Publishing House, 1980(1930). などから伺い知ることができる。また彼らがのめり込んだのが「英国的」スポーツであったことは、一八世紀のナバブたちがインド「土着の」娯楽のパトロンとなっていたことと極めて対照的である。ナバブたちの娯楽については、Spear, P. *The Nabobs*, Oxford Univ. Pr., 1963. を参照のこと。なお、英領植民地におけるスポーツと文化覇権の問題に関する包括的かつ理論的な検討を試みたものとして Stoddart, B. "Sport, Cultural Imperialism, and Colonial Response in the British Empire" in *Comparative Study of Society and History*, 1988, pp.649–673. がある。

(33) Bell, H. *Foreign Colonial Administration in the Far East*, 1928, cit. in 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治』中公新書、一九九一、一四八頁

(34) cit. in 浜渦, p.146.

(35) cit. in Rosslli, J. "The Self Image of Effeteness: Physical Education and Nationalism in Nineteenth-Century Bengal" in *Past and Present*, 86, 1980, pp.122. なおこの論文は、初期のナショナリストたちが自らの文明の「衰退」を肉体的観点から考えていたことや、ナショナリズムが体育活動の推進と歩調を合わせて進められたことなどを論じるものであり、本小論の趣旨との関連からも大変興味深い。また、「男性性」の回復といった問題まで拡張させてロッセリの議論を補足するものとして、以下のものがある。Nandy, Ashis, *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism*, Delhi, Oxford Univ. Pr., 1983.

(36) cit. in, Stoddart, *op.cit.*, p.658.

(37) cit. in, Mackenzie, J.M. *The Empire of Nature: Hunting, Conservation and British Empire*, Manchester, Manchester Univ. Pr., 1988, p.189. なお、英領インドを含む英国植民地のハンティングに関しては他に、Mackenzie, J.M. "The Imperial Pioneer and Hunter and the British Masculine Stereotype in Late Victorian and Edwardian Times" in *Manliness and Morality*, ed. by J.A. Mangan, Manchester Univ. Pr., 1987.

(38) Sir Bartle Frere の発言。出展は不明。cit. in *ibid.*, p.194.

(39) Woody, J.G., *My Sporting Memories*, 1923, cit. in *ibid.*, p.193.

(40) Mackenzie, 1987, *op.cit.*, p.184.

(41) Mackenzie, 1988, *op.cit.*, Chap.8–11, esp., 186–188.

(42) オーウェル、G.『象を撃つ』オーウェル著作集I、一九二〇―一九四〇 平凡社、一九七〇。

(43) オーウェル『ビルマの日々』彩流社、一九八八。

(44) Hutchins, *op.cit.*, p.24.

(45) Ballhatchet, K. 1980. *Race, Sex, and Class Under the Raj*, St. Martin's Press, 1980. Chap.6. なお、英国人兵士の性に対するコントロールは、以下で論じるのとは異なる原則に基づいて行われていた。彼らは兵営内で娼婦をあてがわれたが、性病防止のためそれ以外のインド人女性との接触を禁じられている。性病が単に生物学的現象でなかったことは想像に難くない。くわしくは修論七四―一〇八頁およびBallhatchet, *op.cit.*, chap.1–3. を参照のこと。

(46) Stoler, 1989(b), *op, cit.*, p.651.

(47) Hyam, R. *Empire and Sexuality*, Manchester Univ. Pr., 1990, pp.115–121.

(48) cit. in Ballhatchet, *op.cit.*, p.150.

(49) Greenberber, A.J. *The British Image of India*, Oxford Univ. Pr., 1969.

(50) cit. in Wurgaft, *op.cit.*, p.31.

(51) *ibid.*

(52) Kipling, Rudyard, 1913, *"The Naulahka" in The Bombay Edition of Rudyard Kipling in Prose and Verse*. cit. in Wurgaft ibid., p.389.

(53) Ballhatchet, *op.cit.*, esp. chap.5, 6.

(54) cit. in Showalter, E. "A Passage to India as 'Marriage Fiction': Forster's Sexual Politics" in *Women & Literature*, 5, 2, 1977, p.5.

(55) cit. in Bailey *op.cit.*, p.10.

(56) 先にあげたStoler の他に、Gartrell, B. "Colonial Wives: Villains or Victims?" in *The Incorporated Wife* ed. by Shirley Ardener, Croom Helm 1984, pp.165–185. が英領ウガンダの文脈で、同書のBrownfoot, Janice "Memsahibs in Colonial Malaya: A Study of European Wives in a British Colony and Protectorate, 1900–1940", pp.186–210. が英領マレーシアの文脈で同趣旨の議論をしている。

(57) ナイポール、V・S.『インド――傷ついた文明』岩波現代選書、一九七八。

(58) インドで流行した病気に関する概説的説明は、Mitchell, N. *The Indian Hill-Station: Kodaikanal*. Univ. of Chicago, 1972, pp.13–56. 病気や死の恐怖に関するイギリス人たち自身の言葉は、Allen, C. *Plain Tales from the Raj*, Futura, 1991(1975); Brown, H. *The Sahibs: The Life and Ways of the British in India as Recorded by Themselves*, William Hodge & Company Limited, 1948, pp.37–49. に見出される。

(59) cit. in Kennedy, D. 1990, "The perils of the midday sun: climatic anxieties in the colonial tropics" in *Imperialism and Natural World* ed. by J.M. Mackenzie, Manchester Univ. Pr., 1990, p.103.

(60) 以下環境病因論については Mitchell, *op.cit.*, pp.15–19; King, *op.cit.*, pp.108–115. などによった。

(61) 特に、King, *op.cit.*, pp.109–114, 123–156.

(62) コレラとヒンドゥー聖地に関する議論は、Arnold, D. 1987, "Cholera and Colonialism in British India" in *Past and Present*, 113,

1987, pp.118–151 に詳しい。引用は p.141 から。彼によればコレラは一八六五年から一九四七年までに少なくとも二三〇〇万人の死者を出したという。なお、コレラ流行と聖地巡礼との間には現代の細菌学の視野からは明確な因果関係をたどることができる。しかし、腹部を冷すことによってコレラにかかると考えられ、腹巻上のコレラベルトを身につけることで予防できると信じられていた時代の態度を、現代の細菌学の視野から判断してはならないであろう。

(63) Mitchell, *op.cit.*, pp.15–19.

(64) ウッダラフの太陽光線有害論については、Kennedy, *op.cit.* を参照した。熱帯の日光に対する恐れの起源と歴史的変遷、日よけ帽トピの発達については Renbourn, E.T. "The Life and Death of Solar Topi: A Chapter in the History of Sunstroke" in *Journal of Tropical Medicine and Hygiene*, 65, 1962, pp.203–218. に詳しい。

(65) Kennedy *op.cit.*, p.124.

(66) *ibid.*

(67) Renbourn, *op.cit.* を参照。

(68) Allen, C. *RAJ: A Scrapbook if British India 1877–1947*. Ander Deutsch Limited, 1977, p.52. を参照。なお本書は、健康上あるいは衛生上の配慮が英領インドでいかなる視覚＝物質的表現を取ったかを知るための豊富な資料を提供している。

(69) *ibid.*

(70) 新たに植民地に赴任するものが単に「生物学的」に「純血」であるばかりでなく「文化的」にも「純血」でなければならなかったことは、植民地行政官になるために彼らに課せられた教育がいかなるものであったかを論じた、浜渦 *op.cit.* からうかがい知ることができる。また、定年制が自らの老衰した姿を土着民に見せないことを制度的に保証するものであり、植民者たちの自己イメージと密接に関連したものであったという視点は、サイード、E. *op.cit.*, p.42. が示している。

(71) *ibid.*, p.140. および Allen, 1991, *op.cit.*, pp.255–264 を参照。

(72) Mitchell, *op.cit.*, pp.13–56.

(73) 注 (31) 参照。

(74) 「道具主義的」議論を代表するものとして、例えばエスニシティーと境界維持について論じた Barth, F. *Ethnic Groups and Boundaries*, Little Brown, 1969 がある。

(75) ブルデューの理論的立場は、ブルデュー、P.『実践感覚』みすず書房（特に八二―一〇五頁）に簡潔に整理されている。また彼は、Bourdieu, P. *Distinction: A Social Critique of Judgement of Taste*, (trans. by Richard Price), Harvard Univ. Pr., 1984. で自らの理論を極めて説得力のあるやり方で実際の文化分析に適用してみせた。

(76) フーコー、M.『知の考古学』河出書房新社、一九八一は、権力に「中心＝創始的主体」を求める権力論を強く批判している。特に一八五―一八六頁を参照。

(77) ギャーツ、C.『文化の解釈学2』岩波現代選書、一九八七、四三八頁。

(78) Dorst, J.D. *The Written Suburs: An American Site, An Ethnographic Dilemma*, Univ. of Pennsylvania Pr. 1989, pp.1–4.

(79) Wurgaft, *op.cit.*, pp.11–16, 39, 80, 132.; Greenberber, A.J. *The British Image of India: A Study in Literature of Imperialism 1880–1960*. London, Oxford Univ. Pr., 1969, pp.35–7, 44–5, 78–9, 108–9, 111, 134, 141–2 などを参照のこと。

(80) Wurgaft, *op.cit.*, pp.32–41, 47–49, 79–100; Greenberger, *op.cit.*, pp.37–8, 96–8; Allen, C. 1991, *op.cit.*, pp.197–208. などを参照のこと。

(81) 一八七七年の「皇帝会合」に関しては、人類学的な立場から Cohn, B.S. "Representing Authorty in Victorian India", in *The Invention of Tradition*, E. Hobsbawm and T. Ranger eds., Cambridge Univ. Pr, 1983, pp.165–210. が詳しく論じている。

(82) バブー（Babu）と呼ばれたら彼らに対して向けられたイギリス人たちの軽蔑や否定的イメージを、植民地時代のインドについて論した

書物から捜し当てるのは極めて容易である。例えば、Greenberger, *op.cit.*, pp.49–51, 64, 71–73, 106, 130, 144, 188; Hutchins, *op.cit.*, pp.53–79; Wurgaft, *op.cit.*, pp.39–41, 47, 150–51, 166–68 など。

(83) Metcalf, T.R. *An Imperial Vision: Indian Architecture and Britain's Raj*, Univ. of California Pr., 1989, pp.211–39, esp. pp.222–23. を参照。本書は極めて鋭敏な眼差しで一九世紀から二〇世紀までのインドの公共建造物の建築様式の変遷を分析し、そこから支配者イギリス人の自己イメージの変遷を読み取ろうと試みている。